



# 現 み

著者略歴 山田清三郎

- 1896年 京都に生れる。  
少年時代より各種の勤労と労働に従う。  
1918年 東京に出る。  
1922年 伊藤 とともに「新興文学」発刊。  
1923年 「種蒔く人」同人。  
以後「文芸戦線」「前衛」「戦旗」の編集に携わる。  
1931年 治安維持法で検挙。保釈。  
1934年 治安維持法及び不敬罪で下獄。  
1938年 出獄。  
1939年 渡瀧。  
1945年 ソビエトに抑留。  
1950年 帰国。  
主 著 「プロレタリア文学史」(上下), 「明けない夜はない」  
「転向記」(全三巻) 霧の時代・嵐の時代・氷雪の時代。  
(何れも理論社)。「二十人の被告たち」(新読書社)

1959年11月30日発行

定価 280 円

現場をみた人

著 者 山 田 清 三 郎

発 行 者 藤 山 純 一

印 刷 所 東海出版印刷株式会社

---

発 行 所 新読書社出版部

東京都千代田区神田錦町 3 の19

電 話 (29) 8 0 9 5・8 0 9 6

# 現場を みた人

山田清三郎著 / 新読書社



目

次

|    |                                   |    |
|----|-----------------------------------|----|
| 一章 | 虚空藏祭 <small>くうざうまつり</small> の夜のこと | 九  |
| 二章 | 嘘 発 見 機                           | 三  |
| 三章 | その夜の家                             | 四  |
| 四章 | 愛のなかの見えない悲劇                       | 六  |
| 五章 | 強いられたユダ                           | 七  |
| 六章 | 運命の試練に泣く日笑う夜                      | 八  |
| 七章 | 人間Ⅱ盗聴器                            | 一七 |
| 八章 | 木枯しの吹く夜のこと                        | 二三 |
| 九章 | 二つの別れ                             | 四七 |

十章 托すものと托されるもの

一五

十一章 最後の岐路

一七

十二章 眞実に生きようとして

一九

あとがき

三

裝訂  
栗  
津  
潔

山田清三郎 著

# 人を見た現場

新読書社



## 一章 虚空藏祭の夜のこと

### 1

浅川踏切のところで、鉄道線路に折れた。陸羽街道をそのままゆくよりは、家への距離は、半減するからだった。それでもまだ三軒ぐらいいは、歩かなければならぬ。

安田善作は、かなり疲れ、脚は重かったが、反対に頭のしんは、ますます冴えてゆくばかりだった。

皮膚にひんやりとしめっぽい大気、長々と光ってつづくレール、いつときの霧雨のはれた空から照らす、みずっぽい月の光、穂が出たばかりの稲田にただよう、むせるほどの青くさい匂い。その匂いと、月光の流れのなかを、乏しく見えかくれする、人家の灯影。

安田善作は、胸にあふれるものを感じていた。踏む土——一步一步踏む土は、祖国のふるさとの土であり、それは、妻子とともにくらすわが家につづく土なのだ。稲田の匂いも忘れて、どれくらいだったことだろう、両親につれられて、満州に渡ったのが七つ、だから三十四、五年になる。昨年、シベリアから帰国したのは、九月末で、稲田は、すっかり黄に色づいた出来秋だった。

桜の散るころからの苗代づくり、種播き、蛙の声に伴奏されるような田植、梅雨のなかの草取り。自分も日雇や外交のあい間に手伝った、本家の百姓仕事。それは善作の、幼いころの淡い郷愁につながっていた。そしてその幼いころの郷愁にひかれる思いが、彼をこの晩、黒岩の虚空藏祭にゆかせたのである……

善作はふと、自分の背に自分を感じ、自分の体に亡父を感じた。それは、大正三年か四年かだったのだらう。

やはり八月十六日のお盆の晩——正しくは十七日の午前一時前後にあたるわけだが——彼は父に負われて、このように同じ鉄道線路のうえを、歩いたものにちがいがなかった。

「眠いかい？ 疲れたかい？」

背なかの善作は、父の声をきく。

「金魚もってるかい、父ちゃん」

「ああ、もってるよ、ほうれ」

背に幼い児の重さとぬくみを、さながらにおぼえ、小さい手で、耳のうらをなでられた思いの善作は、思わず声に出していつて、片手をたしかめ、微かに苦が笑いをした。

彼は、ガラスの瓶にいれた、金魚をさげていた。それは、子供たちへのこの夜のみやげだったのだ。

夢のような月あかりにもちあげて、フラスコのなかの金魚の生きているのを確かめると、善作は、親たちが自分

にそそいでくれた愛情を、自分もまたわが子にそのままうけついでいる人間の、不思議さを思うのだった。

善作は、渡満してから、かの地の日本人小学校に入った。一家は、満鉄沿線の南満の新開の街で、雜貨商を営んでいた。日露戦争のあと、日本が満鉄を経営し、これを守る沿線一帯に設けた独立守備隊と、旅順に司令部をもつ関東軍の武力をはいけいに、日本の満蒙権益拡張が国策として押出されるなかであおられた大陸進出の夢、その夢に招かれて、水呑百姓の善作一家は、松川在の家をたたんで、満州への移住を決行したのである。大隈内閣が、対支二カ条の高飛車な要求を、袁世凱政府につきつけた、大正四年のことだった。

第一次大戦に参戦した日本が、あつという間に青島戦争をおこし、ドイツの租借地だった青島を、うばったのは、その前年のことだった。

阿武隈川のはとりの、こんもりとしげった森、その森にかこまれた、古い薨の建造物、その軒の大きな提灯と太い綱で鳴らす平つぱたい鉦。その奥の虚空蔵さん。

境内は、所せましと出ている雑多な露店や、幻灯などの催しものの灯火が、樹々を下から照らしあげ、近郷近在をはじめ、福島、松川、遠くは二本松あたりからも参詣する老若男女がそのなかを賑かに埋めつくしていた。

安田善作の後頭部に、その黒岩虚空藏の夜祭が尾をひいていた。彼は、祭に行つて、かえつて満洲の娘々祭<sup>ニャンニャン</sup>を思い出したのである。はるか幼かったころの追憶に、心ひかれて行つて、渡満後の少年時代の郷愁を、反射的にかきたてられたのだ。

「黒岩の虚空藏さんの祭がこうだった」

娘々祭<sup>ニャンニャン</sup>につれられてゆくと、父も母も、よくそういったものだった。そのことばを善作は、遠い記憶の底をゆすぶりたくつて、はるかな祖国のふるさとの、阿武隈川のはとりの虚空藏祭を、しのんだのである。

満洲の娘々祭は、春にさがけて、やつて来た。そして、娘々祭がすむと、冬枯れた野に春耕の土埃があがり、やがて眼に乏しい土地の木にも、青いものが芽ぶいてくる。娘々祭というと、だから善作の子供心も、何と

なく色めき、弾んだものだった。そして、娘々祭には、小学校を出て撫順にゆくまで、毎年彼はきまつて、原住民の密集する旧市街の関帝廟に、親たちとともに出かけ行くのを、忘れたことはなかった。

「日本人の子供が一人でゆくと、子供さらいにさらわれる……」

親たちはいったものだが、善作は、娘々祭はたのしかった。関帝廟のまわりに出る雑多な露店、猿芝居などの見世物、疫病を焼くという張子の人形を焼くかまどとそ

の火。良縁の願をかけるという廟前にぬかづく姑娘<sup>クラニャン</sup>の姿。廟のまわりを埋める満人の群れ。

その娘々祭で、善作はよく、白麵<sup>グイヂ</sup>（小麦粉）でつくつた、ねじり菓子<sup>グイヂ</sup>をみやげに買った。

虚空藏祭で、善作は、カリントふうのそのねじり菓子を思い出して、露店のどこかで売つていそうな気がしてならないかった。そして、本気でさがしてもみたほどだった。

「満洲の娘々祭はなつかしい……」

善作は思わずつぶやくのだった。

## 2

安田善作は、幾度か手の金魚瓶をもちかえた。

重いというほどのものではないが、歩きにくい鉄道伝いに、落したり、水をこぼしたりしてはならなかった。

善作は、こんなにおそくなることを、家にいつてこなかったことを悔いた。

夜おそくなるのは、めずらしいことではなかった。

商売上のことで、おそくなることもあるし、地域の細胸会議や、党関係のことで、おそくなることもあった。

それはいちいち断らなかつた。予めわかつているばあい、そんな予想がするばあいには、断つて出たが、そうでないばあいも多かった。

ただこの晩は、虚空蔵祭を見に行ったことで、気になつた。それも、自転車ではなく、歩いて行ったために、

思いのほかにおそくなったからである。

「あなた、虚空蔵さんに行つてくる？」

家を出るとき、雪枝がたずねた。

「さあ……」

善作はちよつと考え、

「来年みんなで出かけることにしよう。お前は徹坊をおんぶしてさ」

「来年で、革命がおこっちゃってるんじゃないの」

徹坊に乳を吸わせながら、ちよつと皮肉に、雪枝は笑つたが、善作は悪い気はしなかつた。

「徳田政府ができたつて、虚空蔵さんの祭はあるさ。

民族の伝統とともに、民俗の風習というものは、尊重されなければならぬからね。で、来年はひとつ飴に赤旗をつけて、おれも虚空蔵さんで、じゃんじゃん売ってみるか、赤旗飴でござい……てなくあいに」

それも冗談だったが、口をついて出た、朗かな冗談だった。

「では今晚は、一本つけることにしましょうね、いい

でしよう？」

と、とぼしい家計のやりくりの同意をもとめるために、ちよつとしなをつくつて見せた。雪枝の眉のあたりを、ふと善作は、まぶしいほどに美しく見た。

「じゃ、酒はたのんだよ」

元氣にいつて、土間の自転車を外へ引出すと、善作は飛乗って家を出た。

善作は、ソ連から帰国すると、日雇などもやってみたが、その後松川駅の近くの菓子問屋の販売外交員となつて、自転車のおとに、菓子や飴るいの荷を積んで、近郷近在の店々に卸しにまわっていたのである。

その日、善作は、まず二本松方面をさきにまわった。

二本松で昼の弁当を使い、安達<sup>あたち</sup>にたちよつて、いったん松川に帰り、渋川村をひと走りして、店に帰ってきたのは、安達太良の山なみの蔭に、日の落ちるころだった。

安田善作は、その足で、家に帰るところだったのである。問屋で、虚空藏祭の話が出た。雲はあるが天気はもちそうだから、人は出るだろう。と主人がいったのにつ

られて、

「来年はひとつ、赤旗飴でも仕入れてもらつて、虚空藏で太いに売ってみますか」

と、善作は、朝、妻にいったことを思い出して、主人にも、軽口をたたいたのである。

「赤旗飴？、なるほどな。それや子供が喜ぶぜ。それじゃ善作さん、今年から場所などの下検分をしておなぐちゃ」

と、主人も禿頭をなでて、からかった。

この年の九月には革命がおこるかもしれないということを、共産党筋では前から伝えていたことを、問屋の主人も、善作から吹込まれていたからだ。

九月の革命は、ともかくとしても、当時共産党の進出は、たいへんな勢いだった。この年の一月、衆議院の総選挙で、共産党は三百万以上の得票で、三十五名の当選者を出していた。前回（三年前）の五名にくらべて、実に七倍の躍増だったのだ。

下検分？ それは与太話としても、このときふと善作

は、ひと走り虚空蔵祭に行つて来ようという誘惑に、か  
られたのに無理はなかった。

遠く淡い郷愁につながる、黒岩の森の虚空蔵菩薩には、  
帰国してから善作はまだ行つてはいなかった。それが何  
か負債だったような気が、このときした。彼が家を出る  
とき、夏休みの昇一と八重子は、野に遊びに出ていて家  
にはいなかった。虚空蔵で何かみやげを買つて来て、子  
供たちをおどろかさせたり、よろこばせたりすること  
も、ときにとつての愉しい戯れでもあった。それに、自  
転車を飛ばせば、そう時間がかかると思えなかった。

「じゃ、旦那、帰りは寄りませんからね」

阿武隈川のはとりの黒い森を頭に描いて、菓子問屋を  
とび出した善作は、十分ほどたつて、自転車を手で押し  
て店に引返して来た。チェンがきれたのだった。

「おいてゆきなよ、今晚中にわしが修理をさせておく  
からな」

そういつてくれる主人に、自転車のことは頼んだが、  
善作は家には帰らなかった。妙な意地のようなものを自

分でつくつて、黒岩へ徒歩で出かけて行つたのである。  
ソ連国境の密林の駐屯部隊で一年半、シベリアの捕虜生  
活で三年きたえた彼にとつて、往復十二、三キロの距離  
は、ものの数とは、思いたくはなかったのである。

実際に行つてみると、思いのほかに時間がかかった。  
それに、虚空蔵では、催しの幻灯に見惚れてしまった。  
その時間は短くはなかった。

幻灯は、漫画や実写の捕鯨船など、子供むきのものだ  
つたが、木立のなかの銀幕は、彼に、シベリアの伐採地  
で見た巡回映画を思い出せたのである。で彼は、その銀  
幕の前で、思わず時をすごしてしまったのである。

みやげに金魚を買つたのも、しくじりといえ、しくじ  
りだった。朝になつて、フラスコの金魚が、子供たちの眼  
をかがやかせることは、わかつていた。そのなかに善作  
は、自分にたいする亡父の愛情をしのびたかつたのも、  
嘘ではなかった。しかし、そのためには、彼は、駈足で  
道を突走るわけにはいかなかったのだ。しかし、あとも  
う一息だった。

父の帰りを待ちわびて、つまらなそうに眠ってしまったにちがいない、子供たちの寝顔と、おそらくはまだ針仕事をつづけている雪枝の姿を、思いえがく善作の眼に、行手にもりあがる小山の黒い影が、近づいて来た。片側は、線路の土手から低まった稲田。ちょうどそのあたりのかなりなカーブをすぎると、もう松川駅のシグナルや構内灯が、はつきり見える。善作の家は、その駅をすぎると、あともう半キロとはなかった。

月光がおとす彼の影は、ますます濃くなっていた。さつきまでまだ低くただよっていた、軽い霧雨をまいたあとの雲の名残りは、いつか拭ったように消えて、空の色は、はや秋をきざしていた。

善作はふと本能的に、枕木伝いをさけて、土手草の上に移した。午前一時すぎの、下りの貨物列車が、松

川のほうから近づいてきそうな気がしたからだ。

善作は、このあたりの夜行列車の時刻を、よく心得ていた。それは、彼の家が、線路のすぐそばにあったことと、家を出て歩くのに、線路の上を利用することがならわしだったからだ。

善作は、よいつぱりで、寝てからも眼をさますことが少くなかった。彼は、若いころから——といつても、今もまだやつと四十をすぎたばかりだが——文芸に興味をもち、読んだり、書いたり、句などをつくったりすることが好きだった。撫順炭礦や、鞍山の製鋼所に勤めているころは、社員のあいだで出されている職場雑誌に投稿して、短い文章や句作などが幾度かのつたことがある。

ソ連にいるときにも、民主運動の壁新聞にかいたことがあり、帰国してからも、その趣味はさめなかった。

帰国すると、善作はすぐ共産党に入党した。シベリアの日本人民運動がかかげていたスローガン「民主民族戦線の戦列へ！」にこたえるためだった。彼も、シベリアで筋金を入れてきたというたつぷりな、自負心と意気